

## 「人文学・社会科学が先導する未来社会の共創に向けて (審議のまとめ)」

(学術分科会 人文学・社会科学振興の在り方に関するワーキンググループ、平成30年12月14日) (抜粋)

- 学術研究の国際展開は、学術研究の水準向上や新たな知的展開という観点から極めて有意義であるが、我が国の人文学・社会科学における国際的取組は未だなお課題が多い。実際には、経済学など英語論文を通じた国際発信が日常的に行われている分野もある一方、研究対象が日本語の固有性と密接に関連する分野では、日本語以外の言語による発信に関して他の分野とは異なる固有の乗り越えるべき壁があることなどにより国際展開が進んでいないのも事実ではある。こうした分野ごとの特性には十分な留意が必要であるが、それでもなお、我が国の人文学・社会科学における国際性を高めていくことの重要性は看過されるべきでない。
- 人文学・社会科学が対象とする歴史、文化、社会、制度といった事象の多くはそれぞれの地域に固有のコンテキストから影響を受けているため、単に論文等を外国語に翻訳するというだけでは国際展開として十分とは言えない。他方、そのような特性があるからこそ、我が国発の研究成果を国際発信することや、我が国の研究者が国際共同研究に積極的に参加することにより、異質な背景を持つ研究者同士が関わることで、研究に新しい概念や価値観を生み出したり、お互いのバイアスを超えたメタな学問の確立に貢献したりすることなどが期待できる。そのような場面では、我が国が高等教育や学術研究を母国語でできる数少ない国の一つであることを源泉として創出される価値があることに十分留意する必要がある。
- また、国際化を進めるに当たっては、これまで個々人で蓄積してきた国際的な共同研究等に関するノウハウを次世代に継承させる意味も含め、国際共同研究の拠点となる組織の形成が重要となるが、人文学・社会科学においては必ずしも取組が進んでいない。特に海外のトップレベルの研究者の協力を得るためには、国際的に一定の知名度を得ている組織を中心に、それぞれの組織が人事システムも含めたオープン性を高めつつ、個性のある国際共同研究の拠点組織を形成していくことも有効である。

### 「リスク社会の克服と知的社会の成熟に向けた人文学及び社会科学の振興について（報告）」 （学術分科会、平成24年7月25日）（抜粋）

- 競争や協働が進む世界の変革の中にあって、日本の研究に関心を持つ優れた外国人研究者が日本に来て研さんを積んでいるように、海外の事象に関心を持つ日本人研究者が、海外の研究環境の中で、研究者と切磋琢磨し、国際的に成果を発信することが求められている。また、国際的諸機関との交流の場や世界の優秀な研究者が集まる環境を国内に整備することで、我が国の人文学・社会科学のさらなる発展が期待できる。その際、大学等においては、研究の国際化を支援する体制の充実も求められる。
- 人文・社会科学の研究対象は国内外に共通する事業である場合も多く、本来的に国際的な研究活動を進める素地がある。例えば、少子高齢化に対応した社会システムに関する研究など我が国において行われている様々な研究は、他国にとっても貴重なものであり、国際的な発信と国際交流が活発になれば、日本固有の研究とは異なる知見を有する海外の研究者との対話が生まれ、比較により顕在化する価値の発見をもたらすだけでなく、予期しない分野間連携の進展、さらには国際的なリーダーシップの発揮も期待できる。
- 海外に向けて、我が国の文学や歴史・芸能などの研究や日本特有の経済・社会論に関するデータ等を提供することや、論文等の研究成果を英語等に翻訳するなど、国際的な発信力のさらなる強化を図るとともに、海外の研究者との公開ゼミナールの開催や、英語論文の執筆などが必ずしも十分評価されているとはいえない状況を改善していく必要がある。

「人文・社会科学の振興について－21世紀に期待される役割に応えるための当面の振興方策－（報告）」  
（学術分科会、平成14年6月11日）（抜粋）

- 我が国の人文・社会科学の個々の研究成果及びレベルは諸外国に比べて決して劣るものではない。しかし、これまでの研究は主として日本のみを対象とするか、あるいは諸外国との比較研究が多く、その成果も日本語で表現されることが圧倒的に多かった。こうした「ことば」の問題もあり、英文学術雑誌の刊行、論文投稿など成果の国際発信といった点を含め、人文・社会科学における国際的な取組が不足していた。また自然科学と比べ、研究成果の発信、評価や影響力の面で「日本で自足する」傾向がなかったとは言えない。
- しかし、グローバル化、ボーダレス化は当然のことながら学問の世界にも及んでおり、人文・社会科学においても、我が国の優れた研究成果を英語等で世界に向けて発信する組織的な取組が求められる。さらに、世界的規模で生じている諸問題の分析や解決への提案を、国際的ワークショップ、シンポジウム、フォーラムにおける外国研究者との対話や共同研究を介して推進することにより、国際社会における我が国の貢献が期待されている。